

講演 鳥飼 玖美子氏 (立教大学名誉教授)

こどもの英語にどう向き合うか

講義① 窪菌晴夫氏 (国立国語研究所副所長、日本言語学会前会長)

教科横断的なことばの教育

講義概要

私たちがふだん何気なく使っている数字の発音には、面白い「ことばの法則」がいくつも隠されています。その中には英語や他の言語にも共通した法則もあります。ことばを超えた人間社会や自然界の法則であることも珍しくありません。たとえば1から10まで順番に読むときと、10から逆にカウントダウンした場合は、しばしば4と7の読み方が変わります。4 x 7 = 28を九九で読むときと、式として読むときも同じです。この背後には縁起の悪いものを避けるという一般的な原理が働いています。

この講演では数字の中に潜んでいることばの構造や法則について解説し、数字を教材にした「教科横断的な(算数、国語、英語)ことばの教育」の可能性を探ります。(1)自分たちが使っていることばに気づき、内省力を高める、(2)言語間、方言間、個人間の違いに気づかせる、(3)ことばに規則と例外があることを知る、このようなことを目指した教育を模索したいと思います。

参考文献：窪菌晴夫著『数字とことばの不思議な話』(岩波ジュニア新書 684)

講義 大津由紀雄氏 (明海大学教授、慶應義塾大学名誉教授)

言語の獲得と運用

講義概要

「経験などによる学習がなくても知っていること」があります。たとえば、英語を母語とする人は、1は2とは関連づけられる(平叙文と対応する疑問文という関係が成立する)が、3とは関連づけられないという判断を下すことができます。

- (1) Can eagles that fly swim?
- (2) Eagles that fly can swim.
- (3) Eagles that can fly swim.

母語獲得に関するこうした例を示しながら、その神秘を探り、同時に、外国語学習に示唆するところを考えます。

ことばはあいまい性(ambiguity)を許容する。たとえば、4は双眼鏡を持っているのが男の子という解釈と、女の子という解釈のいずれも持ちえます。

- (4) A boy is looking at a girl with binoculars.

こうした例を示しながら、コミュニケーションの手段としてことばを使うときに注意しなくてはいけないところを考えます。

講義 三森ゆりか氏 (つくば言語技術研究所所長)

英語の前に母語の能力を構築する—言語技術の有効性

講義概要

言語技術(Language arts)は、英語圏を始め、多くの西洋言語圏で基本的な母語教育として実施されている内容の総称であり、日本人がそれを母語である日本語で訓練することは、英語自体の獲得に影響を与えます。西洋言語圏では、分析的・批判的思考(Critical thinking)と豊かな教養をもった国民の育成を目指し、「聞く・話す・読む・書く・考える」の言語の5技能を、幼児期からの体系的なカリキュラムに従って教育します。こうした訓練を受けて育った、例えば英語圏の人々にとって、「話す」とは他人が理解できる組み立てで意思表示をすることであり、「書く」とは決められた形式に則って事柄を提示することです。また、「読む」とは論理的、分析的、批判的に対象を吟味することであり、感覚的に理解することではありません。詰まるところ、日本人が母語である日本語で言語技術を訓練しておくことは、その後の英語獲得に大きく作用することとなります。

講義とワークショップ 渡辺香代子氏 (埼玉県杉戸町立西小学校教員)

「母語から考える英語の語順—小学校における、国語科と連携した「ことばの教育」の視点から」

講義概要

小学校の新学習指導要領の全面実施が来年度に迫っています。高学年で始まる教科外国語科は、今回の改訂の目玉の一つです。小学校の英語教育に一つの変革がもたらされると言ってもよいでしょう。どちらかと言うと、その変革の周辺部分（実施に伴う諸々の対応策等）に目が向けられがちですが、全面実施となる前に、教科となるその前に、今ここでいったん立ち止まり、もっと本質的な部分に目を向けて、小学校の英語教育を捉え直したいと思います。

本ワークショップの題目にある“「ことば」という視点から英語教育を捉え直す”・・・とは、どのようなことなのでしょう？具体的にはどのようにするのでしょうか？・・・語順という一つの題材を通して、その視点について考えてみたいと思います。「英語」という視点に立っての語順指導、「ことば」の視点に立っての語順指導、両者はそのアプローチの仕方も異なれば、国語科と連携した一連の活動によってもたらされるものも異なります。

さあ、では、まずは「ことば」の視点から迫る語順の「ことば」の世界と一緒に出発しましょう！

講義とワークショップ 寺尾 康氏 (静岡県立大学教授)

「言い間違いの分析からみることばの単位」

講義概要

普段の暮らしの中でついうっかりやってしまう言い間違いは「うっかり」や「間違い」という語感からくる印象と異なり、極めて規則的に生じます。さらにこのことは言語の違いを越えて当てはまります。このワークショップでは、日本語と英語、二つの言語の様々な言い間違いを取り上げて、その規則性が教えてくれる私たちの頭/心の中で言葉が組み立てられる際の部品（ことばの単位）の種類とつなぎ方をまず示します。

例えば、ある要素が交換されてしまった次の例で、「動いている」のは何でしょう。

- (1) a. Jom and Terry(←Tom and Jerry, *Jot and Merry とはならない)
b. ワナナバニ園 (←バナナワニ園)
- (2) a. It waits to pay(←pays to wait, *wait to pays とはならない)
b. ながせばはない (←話せば長い)

また、二つの語が混成してしまった場合、どこがつなぎ目になっているでしょう。

- (3) a. smever (←smart + clever)
b. パマキ (パジャマ + ねまき 英語のつなぎポイントと同じかな)

後半はこれらの規則性の発見が児童・生徒への英語入門期にどこまで役立つかを探っていきます。

講義とワークショップ 末岡敏明氏 (東京学芸大学附属小金井中学校教諭)

「音・文字・ことば～その不思議で深い関係」

講義概要

自然音、音の無い音 (?)、言語音。かな文字、ローマ字、アルファベット。それらのものが「ことば」とどのように関わっているかを考えます。

さまざまな校種・職種の方が受講にいらしていると思いますので、できるだけ幅広い話題を扱う予定です。

講義とワークショップ 松井孝志氏 (Sアカデミー講師)

「英語入門期、再入門期における handwriting 指導～書体と補助線と運動技能」

講義概要

主として高校生を対象として四半世紀にわたり「ライティング」の指導をしてきて、「ライティング指導の第一歩は文字指導」と確信しています。小学校段階では、日本の英語教育史上画期的な教材である ” We Can!” の出現により、所謂 Ball & Stick 体、間隔が均等な四線による文字指導からようやく自由になりつつあります。ところが、そのような指導を受けた学習者が、中学校で「球体」然とした指導を受け、困惑している事例も見られ始めました。

母語／生活言語として、音声や語彙を身に付けつつある学習者の文字指導と、第二言語／外国語として音声や語彙と並行して学び始める（続ける）日本での文字指導とを同一視することはできません。

字形・フォントに関する基本的な知識、欧文書体として好ましい運筆を踏まえて、参加者が実際に文字を書くことで運動技能としての handwriting の指導手順を考えます。筆記用具や四線等の補助線の働き、重要性についても可能な限り取り上げます。

